研究

魅せられて綴る藩文学
藩学「四教堂」と先哲（十七）
高妻芳洲

勝間田　三千夫
（会員　佐伯市中村北町）

芳洲、諱は友、字は公直、士直。号は西洲又は芳洲、稱は謙之進、姓は高妻氏、家は代々佐伯藩に仕える。

文化八年（一八一一）佐伯に生まれた。

幼少の頃より学を能くし、業を中島米華の私塾に籍を置き、米華の師事を受けながら藩校四教堂に文政八年十四歳頃まで学んだ。

翌九年、十五歳になって日出藩の藩儒、帆足万里に入門している。

では、日出藩の藩教育はどのようになされていたのかその一端をみると、寛永年中に文学を奨励し、藩学校の基がなされ、寛政年中第十三代木下俊敦が尚文学を振起し、藩臣帆足万里を挙げて儒官とした。

その後、文化年間に帆足家の宅内に就き、藩費を以て一舎を築き、稽古堂と稱して藩士の子弟を教育させた。

この稽古堂は、帆足の家塾であるが、当時にあっては藩学校の性質をもっていた。

藩学は程朱の学を宗とし、旁ら諸家の説を折衷し、洋籍を訳し、かつ医学を修め種痘術を施行する。

この教育に魅せられ、四方より笈を負て来って日出文学は盛んになった。（日出町誌）

また、万里の私塾稽古堂の沿革をみると、帆足万里は十四歳の時、脇蘭室に従い業を受け、その後京師に遊び諸先生に交わり、のち帰藩してその業を修めた。

藩主は万里の篤学を以て、新たに廩を給し中士になし家を松郭に与え儒臣となす。のち上士に昇格し家を中の町に移した。その假住まいの邸宅を以て学舎となし、私塾を開き教授を為す。向学の人来遊する者多く隆盛を極めた。

しかし、文政十年には武頭格に転じ、尚天保三年には執政に登用され、家を城内三の丸に移す。ここに於いても四方から来遊する者が慕い、随従を乞うを以て、三の丸廷内

に假りに私塾を設け、執務を終え、その余暇に塾生を教授している。

しかし、同年後に家を二の丸に移され、これによって塾生は謝絶された。つまり藩の法により、他藩人の二の丸に入るを禁ずによるものである。

万里は天保六年致仕し、中ノ町旧宅に移り、私塾稽古堂は続けられ、四方の学生来たって絶えることなく益々隆盛したという。（帆足万里書簡集より）

以上、高妻芳洲（友）が、帆足万里に入門したとき、日出藩では万里の家塾「稽古堂」が藩校の性質をもっていた時であった。

時は文政九年頃思われる。

万里が藩の上士の時であった。芳洲はその家塾「稽古堂」で万里の「窮理通」や「東潜夫論」などの論説を聴き、また議論を争い大いに勉励された。

しかし、入門から五年後の天保三年、万里は日出藩の執政に任じられ、居所を二の丸に移られたことにより、これ以上勉学を続けられことが出来なくなった。

それは藩の制度により、他藩人を二の丸内に入れることは出来ない禁制によるものであった。

芳洲は、まだまだ万里の薫陶を受けたかったが、帰藩を余儀なくされた。

しかし、芳洲は苦節五年間で稽古堂門下第一の秀才を以て稱せられた。

芳洲は、帰藩して藩校に留まった。時の藩儒中島米華（子玉）は、我が門弟芳洲の才、学を知り、その才器卓越を認め、再び公費遊学を藩候に進言した。

候は、これを許され、芳洲は藩より資糧を賜り、日田咸宜園の広瀬旭荘に入門させた。

そこには、米華の思惑があった。つまり後継者育成のための遊学であった。

かって、米華（子玉）が天下に名高い広瀬淡窓に師事し学問を完成。文政十二年二十七歳の時、藩儒の後継者として藩候に抜擢され四教堂の儒官となった。

よって、芳洲の学問の集大成を咸宜園に学ばせ、自分（米華）の後継者つまり藩学「四教堂」の儒学に推挙する意図があったのではないか。はたまた、既に藩候に進言していたかも知れない。

また、芳洲を広瀬旭荘に入門させたとき、旭荘が彼を一

般門下生とせず、客席（客員門下生）に迎えたことから察すれば、米華が自分の後継になるとはなしていたのかもしれない。

因みに、この旭荘について若干述べておきたい。旭荘（謙吉）は広瀬淡窓より二十五歳下の弟に生まれ、後、縁組して淡窓の養子になって咸宜園を後継した人物である。

かって中島米華（子玉）が桂林園から咸宜園に学ぶ頃、その親交の深さは言うまでもないが、米華より八歳年若で、旭荘（謙吉）は、学問の目標を常に米華に向けていた。

また、淡窓が米華を自分の後継者に欲していただけに、旭荘とも兄弟のように接していた。

旭荘は、かって咸宜園の先輩米華の推薦する人物であればと、芳洲を客席の身分に迎えた。

これより芳洲は、旭荘の薫陶を受け、咸宜園の都講に任じられている。その足跡は、「宜園百家詩編」に香り高く、その名を留めている。

一方、芳洲が咸宜園に在籍二、三年の頃か、天保五年三月十五日、米華は破傷風を患い春秋三十四歳の生涯を閉じた。

その病床にあって作られた「絶命詞」は名詩として諸書にその名を留めている。

さて、米華のなきあと、藩学「四教堂」の学風は、暫くその体をなさなかった。

学職にいる者は怠惰で、人数を充たすにすぎず、適任者はなかった。これを見かねた藩候高泰は、かって中島米華の進言どおり、その後継に高妻芳洲を四教堂の教授に任命した。

これを拝命した芳洲は、慨然として学を興すを以て己が任務と為し、日夜心を奮いたたせ、藩校の学規・学則を確立して課を忠やかに教え諭すことを専らとした。

しかし、未だ数年学政はもとに復らなかった。

それは、己の病にあると（芳洲は幼少より多病を患い、いつも、その持病に悩まされていた）。

その病を恐れて力及ばずと思索して、師広瀬旭荘を訪ね、師の導きを仰いだ。

天保九年四月十八日「淡窓日記の醒斎日暦」の條に「有レ事之二魚町一。佐伯人高妻謙之進来見。中島子玉門人也」と、また明けて二十日、再度旭荘を訪ね

ている。

この時、教導の指南は勿論、幼少より病魔と闘いながら、今在る地位の継続に限界を悟り、後継者の人材について相談したと思われる。

また、この頃の事か、年代は不詳だが旧師帆足万里と書簡が交されている。その時の返書が「帆足万里書簡集に」に次のようにある。

帆足萬里書簡集より

高平芳洲宛

當分膏油之物可祭
貴書殺拜見候、歳晩寒威難凌候、時愚設の御平愈、創口全
合候由、時案ニテハ口疵之張ハ有之候ト之、最早御案進も無
之事ト存候、徐々御歩行ハ日々被成候、愈御全安行不被
成候得ハ、孫子ニ寄リ歩行不成様ニ成可申候、唯徐々御歩行可
被成候、御薬用疵方至極可宜候、此ハ當分膏油之物
敬肉、糖米小麦、醸造物、酒類、物、御禁可被成候、今如行楽下
執筆、重復如此御座候、他、明春可申承候、不宜
萬里
臘月十六日
高平芳洲下

尚平小生より御麥肉被恵忝奉存候、御面會之節、宜御
願申上候、夜間到、不能作書候、順序ニ遣候事、便次
第可送遣候

つまり、医術に心得のある帆足万里に、足部疾患の治療法について指示を仰いでいる。

時は移ろい、天保十三年芳洲は、水筑小相を後継すべく藩候に薦め、挙げて四教堂の教官に為し、二人して子弟の教育を興し、藩校は旧に復した。

（水筑小相については、水筑逍遥・秋月橘門伝に詳述）

これより改めて墓碑銘に勲を見ると、その人物像が浮かんでくる。

芳洲院終譽龍華居士
華養院芳譽貞洲大姉

君諱友字士直號芳洲姓高妻氏家世住　本藩君以文學別出身為中扈従君為人方正辨折是非不為苟合人有過必面折之有善務奨之家雖貧不顧也為文章簡嚴有法又善詩有集各若干巻初　寛龍公賢而好學傷學校衰廢聘松下先生於南筑以為教授文化大闡會公薨先生亦没成徳公継其志抜中島子玉於稠人中為學職文鳳復盛末継子玉歿無復有継者凋其職者怠惰充員而已先是子玉知君才器卓越言之於　公賜資遊于四方學成而歸　今候即位以君任国校教授君慨然以興學為

己任早夜悴勵立法設課諄々誨諭未数年學政復
舊矣君少多病恐力不及乃薦家君興俱教育子弟
学校之盛較諸弐子之時盖有過無不及也君業己
善継二子之業嘉績偉功可以下見先公無慙為肱
天不假之以歯天之福善人其果然耶非耶□□使
君阿諛逢迎不是々非々而身□□壽考取一時之
栄位尸而餐素矣則夜無以見先公而其文章無傳
於後名湮没無聞此君之所擇余之所不必辨也君
以文久元年辛酉臈念二病歿享季五十一配吉田
氏生四男二女長夭餘猶幼君典家君有兄弟之誼
卒之七日其親戚請家君銘墓家君以誌芮新々以
通家之好不敢辞也劉新謹撰併書銘云灼々者菊
猗々者蘭爰全晩節永傳清芬

辱知劉之龍書

芳洲（友）は、佐伯藩に仕え、官職中小姓格を為す。人として方正弁析の是非を為し、みだりに他人の説に同意せず、人に過ちあれば必ず面前で、その人の過ちや欠点をとがめ、善は務めてこれをすすめ、家は貧しといえども顧みらず。文章は簡にして厳かなものでならないとする掟をもっていた。

また、詩を能くし詩集は各若干巻がある。

時の八代藩主毛利高標候は、学問を好み、二十二歳で旧来の学事を改め、城内に藩学四教堂を興し、子弟教育を行ってきたが、学則稍（おろそ）かにして学業は振るわず、学校の衰癈（すいはい）を痛んで、寛政六年春三月、日田咸宜園に教導していた松下筑隠を招聘し教授に為した。

これより文化はおおいに開けていった。

しかし、享和元年高標公は四十八歳で江戸に卒し、また、松下筑隠も文化七年に、四十七歳の生涯を佐伯で閉じた。

その後、藩校は十代高翰（成徳）の時代、文政十一年に学問に秀出した稠人（ちょうじん）の中から、中島米華を抜擢し、学職に為し文風は旧に復した。

米華もまた、天保五年にその生涯を閉じ、芳洲が藩校の教授に任じられた。

そして、四教堂の再興を図りつつ、また後継に水筑小相を教官に、二人して子弟教育にあたり学校は盛んになった。碑に曰く、これを松下先生・子玉（米華）先生の時に較ぶれば、けだしすぎる事はあっても及ばざる事はない。

芳洲の学問は、既に善く、両先生の学問を継ぎ、優れた手柄をたてた。これを先候（高翰）のお目にかけても慙（はじ）ることはない。むだに夭（よう）は歳を以て假（いつわ）らず、夭これ善人に幸いをさずけた。

それは果たして然りか否か、然りといえども、芳洲をしてへつらい、迎合が道理に叶っているか否か判断ならず。しこうして身に富貴長命一時の栄をつらねるも、その位に居て、その職責をつくさず官禄を食む事も、すなわち、死んで先候にお目見することはない。

しこうして、その文章は後の世に傳えることなく、名は亡び絶え、これを聞くことはない。

それは芳洲が択ぶことであって、私（新太郎）がとやかく言うことではない。

芳洲は文久元年（一八六一）陰暦十二月二十二日病を以て歿す。享年五十一歳。

妻は吉田氏の女、四男二女を生む。長男は早世し、その時、自分（新太郎）は幼少であった。

芳洲と水筑小相（秋月橘門）とは兄弟のよしみがある。初七日の日、高妻家の親戚から橘門は、墓碑銘の依頼を請けた。以て誌を一男新太郎に命じた。

新太郎は、高妻家の好に通じているから敢えて辞せなかった。時に新太郎二十歳であった。

なお曰く、芳洲の五十一年の人生は、人として美しく盛んであった。と、その品性を花の王者、菊と蘭に形容して、なおその足跡が清く芳しい徳行であったことを後生に永く傳う、と橘門は認めている。

よって、藩学四教堂は弘化二年（一八四七）秋月橘門に後継された。

終わりに芳洲の作品を示せば筆者の知る限りは次の三編である。

過通應禪師舊栖

香烟作篆文　靜與溪雲合
默坐抱胡琴　孤吟透石榻
迴瀾水淺深　覆屋山周迴
天籟誤笙簧　晚來鳴小鬪

秋夜過其氏江亭壁上有詩次韻

高致是誰家　朱欄臥綠波
遥山秋色早　臨水月明多
寒笛落江柳　香風起隴禾
漁舟燈不滅　歎乃一聲歌

過通應禪師舊栖

香烟作篆文　靜與溪雲合
默坐抱胡琴　孤吟煙石榻
迴欄水淡深　覆屋山周遍
天籟誤笙簧　晚來鳴小閣

この詩を筑後柳川の樺島益親士同は「詩作みなりっぱで観る者これを察す」と纂評（さんひょう）している。

《参考》高妻芳洲、名は友、字は士直、廉平と稱す。芳洲は其の號なり。文化八年を以て佐伯藩士籍に生る。業を帆足萬里に受け、門下一位の秀才を以て称せらる。芳洲為人正直仁慈、他の過失あるを視ては、必ず之を面前に忠告し、人の善事あるに對しては、必ず之を直接に奬勵す。中島子玉の秀才を知り、之を藩主に薦めて學資を給し、廣瀬淡窓に就き學ばしめたるは芳洲なり。秋月橘門の學生時代、日田より佐伯に来たるや、鉦を叩き蒙求の標題を誦して經文に代へ、托鉢しつつ入りしなり。之を見て其の學識と賢明とを察し、家に扶持して藩主に薦め、擧げて教官たらしめたるも芳洲なり。是を以て橘門名を成すの後人に語るに、高妻家は我が濡草鞋なりと言へりき。濡草鞋とは方言にて窮時初めて身を投托したる恩家と言へる意義なり。安政年間藩主毛利高標、藩學四教堂を興し、大に學制を擴張して文教一時隆盛を極めたるも、爾後繼承の學者に乏しく、學事漸く衰兆を来たし、文風落寞また前日の氣勢なきを見るや芳洲大に憤慨し、新に教則を設けて子弟督勵に努め、幾（いくば）くならずして學制再び舊時の觀を呈するに至れり。文久元年十二月十二日病を以て歿す。享年五十有一（佐伯先哲小傳）